

## 嘘のオンパレード

アメリカの外交と防衛の戦略を決定する上で、最も重要な要素を占めるのが情報収集能力である。アメリカの予防戦争をも否定しないその戦略を成立させるためには、卓越したレベルでの情報収集が必要不可欠だ。優秀な情報機関による、世界中を網羅した最新の情報収集と分析が求められる。

しかし、アメリカが戦時に行う「でっちあげ報道」は彼らの十八番と言つていい。父アッシュ時代の湾岸戦争の際にもそれは顕著だった。

開戦当時、イラク兵が保育器の中の未熟児を放り出しているという事件報道がなされ、これを機に全米で反イラク感情が爆発したが、これがアメリカのPR会社が行つたまったくのでっちあげだったことが今では公認の事実となつていて。目撃者というのが実は駐米クウェート大使の娘で、嘘の証言を強いられていたのである。また、水鳥を使つた石油汚染の虚偽報道は世界的に有名となつた。

二〇〇三年のイラク戦争でもその嘘のオンパレードが暴露され始めている。根拠の薄い情報やガセネタが飛び交い、時には意図的に捏造された虚偽の情報によつて、眞実は簡単にねじ曲げられた。

二〇〇一年九月にアッシュは、「イラク政権は生物化学兵器を所有しており、さらに生物化学兵器を生産するための施設を建設中である」との声明を発表した。しかし、戦争終結後も、こうした事実が証明さ

れていなるのはよく知られている通りである。

さらに、一〇〇二年の年頭教書でブッシュは、イラクが西アフリカのニジェールから大量の酸化ウランを購入する計画を持つていると指摘したが、これが偽造文書に基づくものだつたことが今ではわかつてゐる。

同年一月五日にパウエル国務長官（当時）が国連安全保障理事会で引用した「イラクの隠匿、虚偽、脅迫」と題する文章は、湾岸戦争時にアメリカの大学生が書いた古い論文をイギリスの首相官邸が盗用したものだつた。開戦理由の一つに揚げられていた「イラクとアルカイダの結びつき」も未だに証明されていない。

開戦後も、戦意高揚のための捏造報道が続いた。「戦場のヒロイシノ」として英雄に祭り上げられたジェシカ・リンチ上等兵は、後に自らにまつわる報道を否定する形で、

「私はただ震えて神に祈つていただけ」と語り、自分が軍の宣伝に利用されたことを告白している。

## ● 嘘つきオリンピック

世界初の嘘つきオリンピックが開催された。世界中の民族が集まり、互いに自慢の嘘を披露して競い合うのである。

しかし、アメリカ人だけは参加していなかつた。大会委員長がその訊をブッシュ大統領に電話で聞いた。

「どうしてアメリカはこの大会に参加しないのですか？」

ブッシュは言った。

「私たちアメリカ人はいつだって正直さを愛する国民です。嘘は大嫌いなんです」

数日後、ホワイトハウスに金メダルと表彰状が届いた。

### ● 遺伝

ブッシュが父ブッシュに言つた。

「今度の我が軍の最新式の軍艦は凄いですよ。その大きさといえはハイくらいあるほどです」

「お前は本当にオーバーなところがあるな」

父ブッシュが苦笑いしながら口を開いた。

「その癖は直した方がいいと私はもう二万回も言つているというのに」

(一九四字)

早坂隆『世界反米ジョーク集』(中公新書ラクレ、一九〇五年)による